



## 神戸高等商船学校と梅木信子の願い

矢野, 吉治

---

(Citation)

海事博物館研究年報, 53:11-22

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100504878>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504878>



# 神戸高等商船学校と梅木信子の願い

海事博物館顧問 矢野 吉 治

## はじめに

海事博物館企画展2025・戦後80年企画「太平洋戦争時の日本商戦」の市民セミナーにおいて“神戸高等商船学校と梅木信子の願い”と題してお話した。前半は、1917（大正6）年9月の私立川崎商船学校の設立認可に続き、1920（大正9）年8月の国家への学校献納と官立神戸高等商船学校の創立について紹介した。あわせて、1875（明治8）年に関東で発足の三菱商船学校に続く、1882（明治15）年の官立東京商船学校から1925（大正14）年の東京高等商船学校への変遷をお話し、同高等商船学校の「海のますらを」（松竹文化映画〈23分〉）をご覧いただき、戦前の貴重な映像を通じて高等商船学校における当時の風潮と教育や実習訓練の風情を回想いただいた。また、この映像に登場する、かつて同校の練習船「大成丸」の終戦直後における神戸港内での触雷・沈没事故について触れ、さらに神戸高等商船学校練習船「進徳丸」の勇壮な船歌を貴重な進徳丸の帆走映像を背景にお聴きいただいた。

後半では、神戸大学深江キャンパスの総合学術交流棟一階フロアの“梅木ホール”命名の由来について、渡邊信子さんと梅木靖之氏の出会いにはじまり、靖之氏の戦没と梅木信子さんの神戸商船大学における船員教育への思いとともに、信子さんのお亡くなりから鬼界カルデラの西方海域における海洋散骨と“なでしこの会”によるお別れの会について紹介した。なお、梅木ホールの由来については、今企画展の開催期間を通じて館内の大型ディスプレイに約17分間の自動解説をしている。



大成丸（2,424総トン）

1945（昭和20）年10月9日 10時30分過ぎ、復員輸送のための改装工事で大成丸に続き日本丸、海王丸の順に神戸港敏馬（みるめ）泊地＜現、摩耶ふ頭沖＞から神戸三菱造船所へと向かっていたところ、先頭を走る大成丸が神戸港内で触雷し沈没した。総員177名中、職員8人、生徒29人を含む41人が殉職した。



進徳丸（2,792総トン）

1945（昭和20）年7月24日12時15分、北九州と尼崎間の瀬戸内海において石炭輸送を兼ねた実習訓練中の空襲警報下、播磨灘の二見沖で米艦載機の空爆を受けて任意搁座（かくざ：浅瀬への乗りあげ）した。殉職：航海科生徒1人、機関科生徒4人、機関部員1人 重軽傷：16人



## 1. 私立川崎商船学校の設立から官立神戸高等商船学校へ

### ○川崎正藏の遺志

裱（かみしも）教育を排して新機軸の船員教育を！

四面環海の我が国は海運の発展によってはじめてその台頭が期待される。今や我が国の造船・造艦の術は幸いにして多大の進歩を遂げたが未だ充分これを運用して国利民福を増すべき優秀な船員が多いとはいえない。御身は御奉公の一端として商船学校を設立し現在商船教育の通弊たる裱教育を根底より排撃し斯界のための新機軸を出す所がなくてはならぬ。

※裱：江戸時代の武士の礼服（格式張り堅苦しいの意）、斯界（しかい：社会）



川崎正藏  
1837.7~1912.12

### ○川崎芳太郎

士魂商才を！ これからの海員は商業政策の根底を理解する能力が何よりも肝要であり、实际的で、即ち商才ある海員を養成するのが商船学校の眼目であるとし、1916（大正5）年11月、私財を拠出して評議委員会を立ち上げた。1917（大正6）年9月に兵庫県武庫郡本庄村深江の浜に私立川崎商船学校の設立が認可され、翌1918（大正7）年3月に第1期生として航海科30人と機関科20人が入学した。



川崎芳太郎  
1869.1~1920.7

### ○川崎武之助

昇格実現へ！ 1920（大正9）年8月に学校を国家へ献納し、文部省直轄の神戸高等商船学校の創立に至る。このとき、学校の維持資金を基本金と共に国家へ献納し、その私財総額は3,300,284円14銭であった。かくして川崎家三代にわたる偉業により神戸における海技者教育の礎が築かれた。1920年9月にコンパスマークに桜の校章が制定され現在に継承される。1920年11月に第1期生として航海科30人と機関科30人が入学した。



川崎武之助  
1893.9~1946.4

## 2. 神戸高等商船学校と海軍兵籍

神戸高等商船学校が文部省直轄の他の学校と異なる点は生徒の兵籍編入にあり、海軍予備員令[1919（大正8）年勅令第267号]により高等船舶職員を海軍の予備兵力として確保した。生徒は入学と同時に海軍予備生徒として兵籍に入り、卒業と同時に海軍予備少尉・海軍予備機関少尉に任官の後、多くが召集された。※授業料：無料 学用品：貸与または支給 生徒全員に手当支給

### 2.1 神戸高等商船学校規則（抜粋）

第一條：本校ハ実業学校令及ヒ専門学校令ニ依リ高等船舶職員タルヘキ者ニ必要ナル教育ヲ授クルヲ以テ目的トス

第二條：本校ニ航海科及ヒ機関科ヲ置キ其ノ就業年限ヲ各五箇年六箇月トス

第三條：生徒ハ入学ノ日ヨリ海軍兵籍ニ編入セラレ卒業後ハ海軍豫備員令ニ依リ服役スルモノトス

第四條：各学科ノ席上課程ハ三箇年トシ之ヲ六学期ニ分ツ

### 2.2 神戸高等商船学校内則（抜粋）

第一條：本校教育ノ目的ハ健全ナル思想ト完全ナル常識トヲ涵養シ高等船舶職員タルト同時ニ海軍豫備員トシテ職務遂行ニ必要ナル學術技能ヲ習得セシムルニアリ

第七條：航海科ノ席上課程ヲ修了シタル者ハ左ノ実習ヲ為サシム其ノ期間ハ通シテ二箇年六箇月トス

一、軍事学実習：海軍砲術学校ニ於テ約六箇月 二、帆船実習：約一箇年

三、汽船実習：約一箇年

第八條：機関科ノ席上課程ヲ修了シタル者ハ左ノ実習ヲ為サシム其ノ期間ハ通シテ二箇年六箇月トス

一、軍事学実習：海軍砲術学校ニ於テ約六箇月 二、工場実習：機関工場ニ於テ約一箇年

### 三、汽船実習：約一箇年

第十一條：入学期ハ毎年四月及ヒ十一月ノ学期初メトス

第十二條：入学ヲ許可スヘキ者ハ品行方正ニシテ入学期ニ於テ年齢十六年以上二十一年未満トス

## 3. 戦時徴用船と戦没者数（館内展示パネルの解説から抜粋）

### 3.1 忘れ去られた徴用船と戦没船員

大正から昭和初期にかけて瀬戸内海の各地で工業化が進み、燃料となる石炭の大量輸送に迫られ、従来の木造帆船に代わる焼玉機関を搭載した木造機帆船が瀬戸内各所の小さな造船所で次々と建造された。各地の物流を海路で支えた機帆船であったが、昭和12（1937）年の日中戦争勃発以後、戦火の拡大に伴い、中でも100トン未満の小型木造船、特に遠洋漁船や機帆船の殆どが軍部に徴用され、黒塗りの船体に申し訳程度の武装が施された。これらの船は食料や軍需物資を搭載し、護衛も無いままに南方海域へ帰還の確約のない航海へと船出した。機帆船や漁船については商船ほどの正確な記録が残っていないが、数名の乗組員で任務にあたり、九州から島伝いに南下し、小型であったが故に攻撃を免れて生き延びた船もあったようだ。愛媛県の伯方町では、徴用機帆船60隻の内、7割が帰還叶わず、また、波方町では140隻中、残ったのはわずか22隻であった。

戦時においては不可欠な兵站輸送であるが、戦況の悪化につれて潜水艦や航空戦力により多くの徴用船が幾多の尊い人命とともに海の藻屑と化した。戦没した船員は6万643人、当時の日本人船員の実に49パーセントにのぼり、この内、14歳から19歳の若年船員が19,060人で、7,240隻の船（官民一般商船：3,575隻、機帆船：2,070隻、漁船：1,595隻）と運命を共にし、わが国の商船隊はここに壊滅した。軍人の損耗率（動員された人数に対する戦死者の比率）は陸軍が約20%、海軍では約16%であったことから、徴用船員の比率が際立って高い（※戦没した船と海員の資料館〈神戸市中央区海岸通〉提供）。

### 3.2 神戸高等商船学校の卒業者数と戦没者数

神戸高等商船学校の第1期生（大正14〈1925〉年6月卒）から第44期生（昭和20〈1945〉年3月卒）の卒業者数と戦没者数は、航海科1,505人中、戦没者が440人（戦没率：29.2%）、また、機関科1,487人中、戦没者は354人（戦没率：23.8%）で、全卒業生2,992人の内、戦没者が794人、戦没率は26.5%に及んだ。



神戸高等商船学校全景〈1931（昭和6）年頃〉



銃隊教練の様子 1930（昭和5年）頃

## 4. 深江キャンパス総合学術交流棟一階の梅木ホールの由来

太平洋戦争で没した幾多の人、あまたの船にはそれぞれに生き立ちがあり、一人ひとり、船それぞれの生涯に歴史と運命があった。海に消えた幾多の御霊と数多の船の中から、お一人と、もと商船1隻に因んだ神戸大学深江キャンパスの「梅木ホール」命名の由来を紹介する。

【梅木ホールの銘板】（総合学術交流棟1階フロアに掲示）

この「梅木ホール（梅木Yホール・梅木Nホール）」の名前には、梅木靖之・信子夫妻への感謝と敬意が込められています。梅木靖之氏は、海事科学部の前身となった神戸高等商船学校機関科第35期生の方です。靖之氏は卒業後、海軍少尉に任官されて戦地へ赴き、出征中の昭和18年10月22日に東シナ海で戦死されました。靖之氏の亡き後、信子氏は医師を目指して上京され、東京女子医学専門学校（現在の東京女子医科大学）で学ばれた後、長年にわたって医師として活躍されました。

平成10年、信子氏は亡き靖之氏の後輩に当たる神戸商船大学学生の海外派遣や図書購入などのための寄附をお申し出になりました。そして平成11年から、統合により神戸大学海事科学部となった今日までの間、多額のご寄附を頂戴しております。その結果、現在まで延べ200名以上の学生が国内外の学会参加、国際交流活動や大学院への進学等にあたって、「梅木信子奨学会」からの温かいご支援を受けております。ここに、ホールの改装を契機とし、そのお名前を冠することにより、梅木靖之・信子夫妻に心からの謝意を表します。

平成23（2011）年3月 神戸大学大学院海事科学研究科長・神戸大学海事科学部長 小田啓二

## 5. 渡邊信子さんと梅木靖之氏（※一部の敬称略）

渡邊信子さんは1920（大正9）年2月5日に大分県の臼杵に生まれ、幼児期にクリスチャンで教護院校長を務める父や母とともに兵庫県の加古川へと移り住んだ。女学校卒業後は小学校教員として勤務のかたわら軍需工場において奉仕活動に勤めた。一方、後に伴侶となる梅木靖之氏は1917（大正6）年12月8日に大分県玖珠郡玖珠町生まれで、播州土山の渡邊家へ嫁いだ姉がいた。そこには純情可憐なお嬢様の渡邊信子さんがいて、靖之氏が姉宅を訪問した時に信子さんとの運命の出会いがあり、戦時下であったが二人の清らかな愛は着実に成長し婚約に至った（信子18歳・靖之21歳）。



神戸高等商船学校第35期機関科A班  
前列左から3人目が梅木靖之氏



女学校1年頃の渡邊信子さん



高等商船学校機関科実習生  
（東京・第107期と神戸・第35期生）  
中列右から4人目が梅木靖之氏  
東京・神戸と両校名の記載があることから日本郵船  
「龍田丸」における汽船実習の開始前



龍田丸（TATUTA MARU）、16,955総トン

日本郵船㈱の北米サンフランシスコ航路

ディーゼル4基・16,000馬力 速力19ノット

1930（昭和5）年3月に浅間丸型の3番船として三菱長崎造船所にて竣工

※1942（昭和17）年2月に日英要員交換船としてアフリカのロレンソ・マルケスを往復

1941（昭和16）年12月8日、靖之氏24歳の誕生日のその日、靖之氏は米国からの最後の引揚船である日本郵船の「龍田丸」にて汽船実習中であり、北米のシアトルを出港後、アリューシャン列島南方の日付変

更線付近で開戦を知った。邦人を満載していた龍田丸では日本軍のハワイ奇襲による報復を懸念して乗組員全員が頭を丸坊主にして死を覚悟したという。その後、龍田丸は無事に横浜へ帰還している。

### 5.1 梅木靖之氏の召集

靖之氏は1942（昭和17）年5月に神戸高等商船学校を卒業し、同月24日に海軍予備機関少尉に任官、6月5日に召集された。その後、横須賀鎮守府・海軍工機学校における初任士官研修を終えて7月中旬に戦艦長門へと配属され、その6ヶ月後には海軍特設巡洋艦「栗田丸」に乗艦した。

※1943（昭和18）年10月1日、栗田丸は特設巡洋艦の任務を解かれて特設運送船へと類別変更された。

### 5.2 靖之氏の戦死と入籍

結婚を1ヶ月後にひかえた1943（昭和18）年10月22日の早朝、特設運送船「栗田丸」海軍機関少尉梅木靖之氏が戦死（没後機関中尉へ昇進）し、信子は至上の幸福と最愛の人を永遠に失った（靖之26歳・信子23歳）。

靖之氏の戦死から3ヶ月後の1944（昭和19）年1月29日、大分県日田区裁判所の裁定を経て入籍、遺影と白無垢の誰一人声を立てない静寂な式に臨んだ。同年12月28日に大分県玖珠郡玖珠町長から「大正9年2月5日生 梅木信子 右之者ハ故海軍中尉梅木靖之ノ妻タルコトヲ証明ス」との結婚証明書が発給された。



婚約中の靖之氏と信子さん  
1943（昭和18）年9月頃撮影  
[靖之氏戦死の1ヶ月前]

### 5.3 医学の道へ

当時、軍人遺族には医学の道への特典があり、信子は軍医になって戦地へ赴き、あわよくば戦死して靖国で亡き夫と再会することを強く望み、女子醫専への進学を志した。靖之氏が命を賭して信子に与えた医学への道であった。

- ・1945（昭和20）年1月31日 東京女子医学専門学校に合格
- ・1950（昭和25）年3月31日 東京女子医学専門学校を卒業、その後、国立大久保病院（元陸軍病院）で1年間のインターン兼結核療養
- ・1951（昭和26）年3月 インターン終了
- ・1951（昭和26）年7月31日 第十回医師国家試験合格、浜松市の聖隷病院で結核療養兼研究生活後、信州大学病院（医学部精神科教室）の研修生（2年間）、その後、東京女子医大附属病院研修生（3年間）
- ・1960（昭和35）年3月 東京女子医学専門学校卒業10年後に学位取得
- ・1960（昭和35）年 東京日野市で内科・小児科を開業し地域医療に携わる
- ・2009（平成21）年3月 閉院後、海が好きで船乗りを夢見た靖之氏との思い出の地、神戸に戻る

### 5.4 比翼歌碑の建立

1994（平成6）年に靖之氏との思い出の地「淡路島の生穂」に歌碑を建立した。

♪ ときわ木の変わることなき緑こそ往でゆく我的心とぞしれ 靖之  
♪ ときわ木の変わることなき緑もて君に捧げんわが真心ぞ 信子

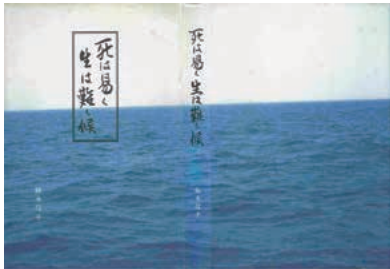
### 5.5 著書

医師として活躍する傍ら、次を執筆した。

- ・1996（平成8）年8月 死は易く生は難く候 梅木信子（76歳）〈幸書房〉
- ・2012（平成24）年10月 なでしこと君に呼ばれて 梅木信子（92歳）〈海鳥社〉
- ・2012（平成24）年10月 歌集 ときは木の愛を誓ひて 梅木信子（92歳）〈海鳥社〉
- ・2016（平成28）年4月 ひとりとは安らぎ感謝のとき 梅木信子（96歳）〈KADOKAWA〉



淡路島生穂の比翼歌碑  
1994（平成6）年



死は易く生は難く候



なでしこ君と呼ばれて



歌集 ときは木の愛を誓ひて



ひとりには安らぎ感謝のとき



出版記念会 2012（平成24）年12月2日（信子92歳）



## 5.6 梅木信子奨学会の設立と感謝状の授受〔1999（平成11）年5月21日〕

若くして戦没した夫、靖之氏のように、海の好きな、海に心を寄せる人材を一人でも多く手助けしよう  
と奨学会を設立して靖之氏の夢を学生に託した（原資1億円超）。

梅木信子奨学会の設立にあたり、当時、神戸商船大学の原 潔学長と財団法人神戸商船大学後援会の近藤鎮雄会長から感謝状が贈られた。

※学生の国内外の学会参加や国際交流、大学院への進学、困窮学生の生活や学費援助など、現状300人を超える学生を支援するとともにキャンパス施設等への援助を継続中である。



感謝状 1999（平成11）年5月21日（信子79歳）

## 5.7 梅木ホールの誕生

2011（平成23）年3月24日、梅木靖之・信子夫妻への感謝と敬意を込めて深江キャンパスの総合学術交流棟一階フロアを「梅木ホール」に、また、同フロアの共用2施設をそれぞれ「梅木Yホール」、「梅木Nホール」と命名してお二人の功績を称えた。



梅木ホールの誕生



梅木信子81歳



現役学生との交流（信子96歳）

## 5.8 一般財団法人 梅木靖之記念財団の設立〔2016（平成28）年3月16日〕

奨学会では資金の運用が限られることから、若くして戦没した靖之氏の“海への夢と希望”を長く存続し、発展充実に、海事科学の振興とともに有為な人材の育成を願って発展的に財団を設立した。この原資には、夫で海軍機関中尉の故梅木靖之氏の命の代償である遺族年金（1952年から受給）を当て、国のために尽くして亡くなった夫の遺志を未来へ投資することにした（原資1億円）。

## 6. 夫、靖之氏のもとへ

### 6.1 永眠

2017（平成29）年11月1日に散歩中の転倒で入院し、回復療養中で退院3日前の11月17日の22時30分に動脈瘤破裂により永眠、翌11月18日に神戸大学医学部へ献体のため搬送された（信子97歳）。

### 6.2 お骨上げ

2018（平成30）年5月29日12時15分、神戸・鶴越斎場にて“なでしこの会”によりお骨上げが執り行われた。※なでしこの会（梅木信子先生を見守り交流する会）の主なメンバー【敬称略】

原 潔、石田廣史、小田啓二、古莊雅生、山尾 均（梅木先生が東京・日野から垂水へ転居当時の海事科学部事務長）、滝本純治（淡路島に建立した比翼歌碑を守る神戸商船大学OB）・佳苗夫妻

矢野吉治（深江丸船長〈大分県出身〉、深江丸の沖縄・仙台塩竈航海での船医乗船対応、海洋散骨）

### 6.3 海洋散骨

梅木信子先生の生前からたっpegのご希望であった“海洋散骨”を、2016（平成28）年度に始動した深江丸（大学院海事科学研究科附属練習船・449総トン・全長50m）による鹿児島県薩摩半島南の海底に位置する“鬼界カルデラと周辺海域”の第5次探査航海（2018年10月19日～11月2日）において催行した。夫、梅木靖之海軍機関中尉の戦死（1943（昭和18）年10月22日）から75年の時を経た2018（平成30）年10月22日の夕刻、この日、17時38分の日没に合わせて散骨の機会を設け、乗船者31名総員で梅木靖之氏のもとへお見送りした。

#### 【梅木信子先生の深江丸海洋散骨式】

日 時：2018（平成30）年10月22日（月）17時30分

場 所：鬼界カルデラの西方海域（北緯30度50分，東経130度08分）

一、開式の辞

二、船長（矢野吉治）告辞と梅木靖之・信子夫妻の紹介

三、散骨及び“なでしこ”の献花

散骨 船長、鈴木桂子教授（探査代表）、古莊雅生教授（なでしこの会代表）

献花 参列者（乗船者）全員

四、汽笛吹鳴と黙祷（1分間）

五、閉式の辞



深江丸サロンの祭壇



散骨式の祭壇



散骨式（深江丸前部甲板）



なでしこの会代表による散骨



親族に代わり船長が最後の献花



汽笛吹鳴と黙祷でお別れ



海軍特設運送船栗田丸の沈没海域と梅木信子先生の海洋散骨海域

## 6.4 梅木信子先生を偲ぶ会

2018（平成30）年12月22日、梅木夫妻のご厚意に報いるため、「梅木信子先生を偲ぶ会」が“なでしこの会”を中心に神戸大学深江キャンパス総合学術交流棟1階の梅木Yホールで催され、故梅木靖之氏・信子さんご夫妻へ感謝の気持ちをお伝えして最後のお別れをした。



梅木Yホール



祭壇での献花



なでしこの会による進行



梅木信子先生を偲ぶ会への参列者  
(2018 (平成30) 年12月22日)

## 7. 貨物船「栗田丸」、海軍特設巡洋艦 / 特設運送船「栗田丸」について

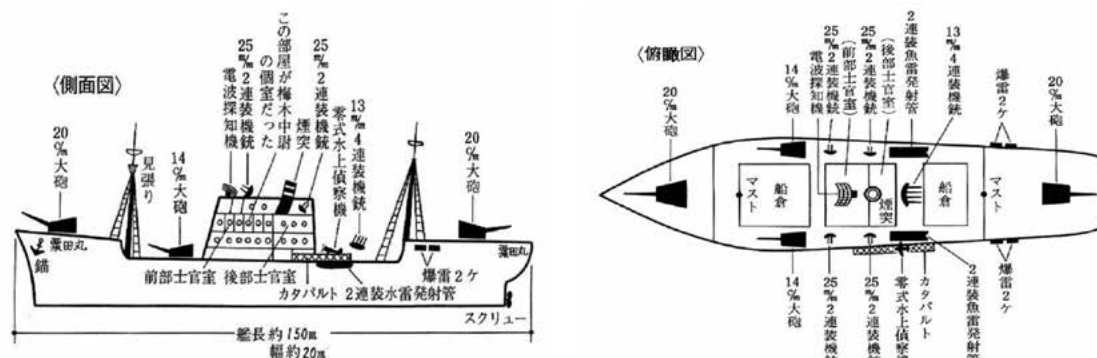
### 7.1 栗田丸の生涯

栗田丸は、赤城丸、有馬丸、浅香丸、吾妻丸とともに「A型船」と呼ばれる日本郵船の優秀貨物船で、1937（昭和12）年12月23日に三菱重工業長崎造船所で竣工した。当初、この5隻は欧州航路の英国・リバプール線改善のための新造であったが、このころ新設されたばかりの東航世界一周航路に就航し、往路は日本から太平洋を渡り、中米のパナマ運河〈1914（大正3）年開通〉を通航して大西洋からドイツのハンブルグに至り、帰途は地中海を経てスエズ運河〈1869（明治2）年開通〉を経由し、インド洋から東シナ海を経て日本へと戻った。しかし、1939（昭和14）年9月に欧州で第二次世界大戦が勃発したことから、わが国の優秀船はその保護のために同航路から次々と撤退した。昭和15年5月にこの航路が休航状態になり、これらの船隊は南米航路へと投入されたが、太平洋戦争開戦直前の1941（昭和16）年8月にはこの航路も休航になった。

このような情勢下、海軍は、浅香丸、赤城丸、能代丸とともに栗田丸を特設巡洋艦に改装して使用することを決定した。中国・漢口で荷役中の栗田丸に急遽帰国命令が出され、神戸に戻った昭和16年8月16日に海軍へ徴用された。その後、8月23日から10月5日にかけて三菱重工業神戸造船所において軍艦への改装工事が施され、9月5日には特設巡洋艦として呉鎮守府籍になり、艦尾には軍艦旗が翻った。この改装で栗田丸に20センチ砲と14センチ砲が各2門、25ミリ連装機銃2基、13ミリ4連装機銃2基、13ミリ単装機銃4基と7.7ミリ単装機銃3基に加え、カタパルトや魚雷発射装置、爆雷装置などの兵装が新たに装備された。

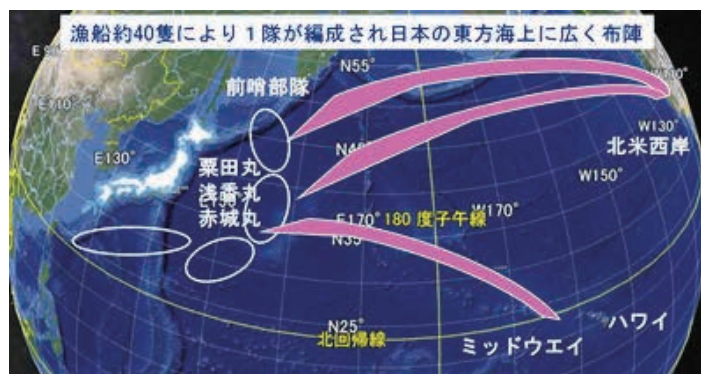
| 船 名 栗 田 丸（あわたまる）        |                         |         |                                        |      |
|-------------------------|-------------------------|---------|----------------------------------------|------|
| 船 主                     | 建 造 所                   |         | 竣工年月日／沈没年月日                            |      |
| 日本郵船(株)                 | 三菱重工業・長崎造船所             |         | 1937(昭和12)年12月23日<br>1943(昭和18)年10月22日 |      |
| 全長 × 全幅 × 深さ(m)         | 総トン数 (トン)               |         | 徴用種別                                   |      |
| 147.5 × 19.0 × 10.5     | 7,397 GT                |         | 海軍標備船<br>特設巡洋艦/特設運送船                   |      |
| 主機関の種類と推進軸数             | 主機関出力 (馬力)              |         | 速 力 (ノット)                              |      |
| 三菱MS型ディーゼル機関<br>1基 × 1軸 | 8,000 HP<br>最大 9,711 HP |         | 航海速力 16 knots<br>最大速力 19 knots         |      |
| 航続距離                    | 貨物船時乗組員数                | 海軍戦没兵士数 | 陸軍戦没兵士数                                | 生存者数 |
| 36,000海里<br>(66,600 km) | 61名                     | 308名    | 1,158名                                 | 156名 |

貨物船 / 海軍特設巡洋艦 / 特設運送船 栗田丸要目



日本郵船A型貨物船「栗田丸」、海軍特設巡洋艦／特設運送船「栗田丸」の武装略図  
 〈梅木信子著書「死は易く生は難し候」から引用〉

開戦当時、栗田丸は浅香丸と2隻で連合艦隊第五艦隊に所属する第22船隊に編入され、その後は赤城丸も加わり、主として北方海域を警備する前哨部隊として釧路と横須賀を根拠地に行動した。前哨として直接の目や耳となる監視艇隊は民間から徴用された漁船約40隻により1隊が編成され、これらの監視艇は本邦のはるか東方600～700海里（～1,300km）に広く布陣して米軍の襲来を警戒した。特設巡洋艦隊は洋上に点々と配備された監視艇群の母艦として連絡や補給を行うとともに、米機動部隊の本邦への接近をいち早く察知して阻止する重要な任務を担っていた。



日本の東方・北方海域の前哨部隊布陣の状況

このような中、1942（昭和17）年4月18日午前6時30分、哨戒線上の一船で底引き網漁船の「第二十三日東丸（90総トン）」から栗田丸に「敵艦隊発見」との決死の入電があり、栗田丸から直ちに木更津航空戦隊司令部へ「犬吠埼の東方600海里に米空母2隻あり」と打電した。空母艦隊発見の第一報を報告した日東丸はこの直後に米艦隊の急襲を受けて兵曹長以下14名の全員が船もろとも海に没した。同日の午後には米空母ホーネットとエンタープライズより発艦したB25爆撃機16機が東京をはじめ日本の主要都市を空爆している。

栗田丸は昭和17年6月のキスカ攻略作戦で輸送任務にあたり、翌、昭和18年3月のアッツ島輸送任務に成功後、5月からは千島列島海域の哨戒と防備にあたり、7月のキスカ島撤退作戦では応急収容隊として

行動した。その後は、日本軍の千島撤収と南方戦線の増強に伴い北方海域を離れて一時帰国した後、9月に丁1号輸送部隊第三輸送部隊としてポナペ島への輸送任務につき、同月18日に広島の子品を出港し、26日のポナペを経てトラック諸島へと転戦した。

## 7.2 栗田丸沈没

栗田丸は1943（昭和18）年10月1日に特設巡洋艦の任務を解かれて特設運送船へと類別変更され、新たに第14戦隊の配属になったが、特設巡洋艦からの機装転換工事はなされていない。トラックからは丁四号輸送部隊第三輸送部隊に編入されて中国の上海へと向かった。上海で第二梯団に組み込まれた栗田丸は1,158名の陸軍兵士を収容し、3,700立方メートルの武器、弾薬、糧食などを積載後、同じく特設運送船の「清澄丸」「護国丸」「日枝丸」とともに、軽巡洋艦「五十鈴」「那珂」、駆逐艦「浦風」「野分」「舞風」「山雲」の護衛の下、10月20日の夕刻18時10分にラバウルへ向けて上海の呉淞海軍棧橋を離れ、潜水艦による魚雷攻撃を回避するため“之字運動航行”を続けながら東シナ海を南下した。

翌10月21日午後にはこれら輸送船団の存在を米潜水艦 Shad（SS-235）と Cero（SS-225）とともにウルフパック作戦を展開する Grayback（SS-208）の察知するところになり、グレイバックは約8,200メートルまで接近後、浮上して速力を上げ船団の前方へと進出、栗田丸に向けて6本の魚雷を発射した。この内、4本が栗田丸に命中し、1発目は後部機関室に、次の1本は火薬庫で炸裂し大爆発を起こして船体が折れた。栗田丸はわずか1分半足らずで北緯26度49分・東経125度03分の東シナ海に轟沈、昭和18年10月22日午前3時47分、瞬時の出来事であった。直後から船団を護衛していた駆逐艦「野分」と「舞風」が兵員の救助にあたったが、栗田丸の生存者は指揮官を含み、海軍85名と陸軍71名の計156名を数えるのみで、海軍223名と陸軍1,087名のあわせて1,310名の兵士が船と運命を共にして早朝の海に消えた。

丁四号輸送作戦と称する陸軍部隊の南方転進作戦の中で、船もろとも殆ど壊滅という大きな犠牲を払ったのは栗田丸のみであり、その後継続された同作戦でも清澄丸、護国丸、日枝丸のいずれもが攻撃は受けたものの、轟沈、沈没には至らず、栗田丸は悲運の船であった。いかなる轟沈でも沈むのに10分から30分はかかるといわれ、早朝の一瞬のできごとに、その犠牲は甚大であった。

## 7.3 第四駆逐隊司令から佐世保鎮守府への打電

栗田丸を護衛していた第四駆逐隊司令から佐世保鎮守府への打電は次の通り。

『丁四号輸送部隊第三輸送部隊、二十二日午前三時四十八分、基準針路一五零度、速力十四節半、之字運動航行中、北緯二十六度三十二分、東経一二五度零五分において栗田丸は敵潜の雷撃を受け、魚雷四本が命中し直ちに沈没す。当時の天候半晴、北東の風九メートル、海上の波やや高く、視界十キロメートル……（中略）…… 午前九時四十分栗田丸生存者は第四駆逐隊に収容せり』

## 7.4 栗田丸の除籍と解傭

本来、貨物と人、それに当時は国際間の様々な情報を安全確実に送り届けることを生業として設計建造された一般船は、頑丈な船体と装甲や武装を有する軍艦とはその構造が異なり、武力に対して船殻等の防衛は無力に近いものであったろう。日本海軍の「海戦」を中心とした「大艦巨砲主義」に対して、米海軍は潜水艦を主力とする「輸送・補給ルート」の破壊を徹底したことから、日本側の兵站輸送に甚大な損失をもたらした。潜水艦の建造隻数は米国317隻、日本179隻、独国約1200隻とされる。栗田丸は1944（昭和19）年1月5日に除籍・解傭され、わずか6年という、船としてはあまりにも短い生涯をここに終えた。

### 〈参考〉米潜水艦 Grayback（SS-208）

米潜水艦 SS-208グレイバックについては、1944年3月7日にミッドウェイに帰還する予定であったが、その後の消息が不明で、同月30日に完全喪失と発表され、米喪失潜水艦52隻中の1隻になった。日本軍の記録から、中島製九七式艦上攻撃機より投下された500ポンド爆弾の直撃を受けて爆発沈没していたことがわかり、80名のクルーが艦とともに海に消えた。2018年になって同艦の沈没場所が特定され、翌年の6月にはスマトラ島沖92km、水深400メートルの海底に眠るグレイバックの艦名が潜水艇により確認された。

## おわりに

海事博物館では江戸時代後期から日本沿岸や瀬戸内海で活躍した廻船などの和船模型を始め、和船の部分実物、船大工の板図や道具類、航路図、航海の安全を祈願して奉納された絵馬、西洋型帆船や商船模型、近代の航海用具、レシプロ機関やボイラー模型、船や船旅と近代の日本商船隊に関連したコレクションなど、神戸高等商船学校時代から神戸商船大学・神戸大学を通じた海事関連資料約4万点を収蔵し、常設展示の他、企画展のテーマにより特別展示を行う。

次回、梅木信子先生をご紹介する資料が表舞台に顔を出すのはいつになるかわからない。そこで2011（平成23）年3月24日に梅木靖之・信子夫妻への感謝と敬意を込めて命名された神戸大学深江キャンパスの総合学術交流棟1階フロアの梅木Y及びNホールの由来について、今般、あえてここに紹介させていただいた。年月の経過とともに、かつて梅木信子先生と親交のあった教職員は次々と深江キャンパスを去っているが、梅木信子奨学会と一般財団法人梅木靖之記念財団による学生や教員等を対象にした支援は、その設立の目的に則り脈々と継続されている。たとえ人や世代が入れ替わろうが、梅木ホール存在の趣旨を受け継いでいただけることを願うばかりである。

## 参考文献

- 1) 神戸商船大学七十五周年記念誌
- 2) 戦没した船と海員の資料館（神戸市中央区海岸通）提供資料
- 3) 梅木信子遺品及びアルバム
- 4) 梅木信子：死は易く生は難く候 1996（平成8）年8月
- 5) 梅木信子：なでしこと君に呼ばれて 2012（平成24）年10月
- 6) 梅木信子：ひとりには安らぎ感謝のとき 2016（平成28）年4月 他

## 著者略歴

昭和32（1957）年2月 大分県生まれ  
昭和54（1979）年9月 神戸商船大学商船学部航海学科卒業（第24期生、商船大学4年半制最後の期）  
昭和54（1979）年10月～昭和59（1984）年3月 運輸省航海訓練所助手（運輸教官）  
昭和59（1984）年4月～昭和61（1986）年3月 神戸商船大学航海計器学研究室助手（文部教官）  
昭和61（1986）年4月～平成6（1994）年3月 運輸省航海訓練所講師・助教授（運輸教官）  
練習船海王丸・銀河丸・北斗丸・大成丸・青雲丸乗船  
平成6（1994）年4月～平成9（1997）年3月 運輸省四国運輸局船員部海技試験官（運輸技官）  
平成9（1997）年4月～神戸商船大学・神戸大学助教授・准教授・教授（深江丸船長兼任）  
平成24（2012）年7月～神戸大学海事博物館長  
令和4（2022）年3月15日 深江丸売払いに伴い深江丸船長解任  
3月31日 定年退職・海事博物館長解任  
4月1日 神戸大学名誉教授・海事博物館顧問  
（一財）梅木靖之記念財団理事 他